

令和 8 年度

一 般 選 抜 (I 期) 問 題

試験日 1 月 31 日

国 語

試験開始までに下記の注意事項をよく読んでください。

注 意 事 項

- ① 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開いてはいけません。
- ② 開始の合図後、解答用紙に「氏名」、「個人番号」を記入すること。
- ③ 受験票、筆記用具以外は、机の上に置かないこと。
- ④ 受験票は机の上に貼付してある「個人番号」の手前に置くこと。
- ⑤ 記述解答で、字数の指定がある問題では句読点は1字として数えること。
- ⑥ 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- ⑦ 試験中は退席しないこと。(気分が悪くなった場合は、手を挙げて監督者に知らせること)
- ⑧ 試験終了後、この問題冊子は持ち帰ること。

〔一〕 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

詩人の谷川俊太郎さんと話したとき、詩人が自作の詩を朗読する試みに話が及びました。この試みはこのごろだいたい行われることが多くなったようです。といってもまだまだ「試み」という以上に世間に広まっているとはいえないらしい。

詩人が人びとの前で自分の作った詩を朗誦あるいはうたうということは、これは元来詩人の本業というか、本来あるべき姿であって、古代ヨーロッパの吟遊詩人や唐の都における杜甫や李白あるいは安倍仲麻呂を思いおこすまでもなく、現代でもソビエトにおけるエフトシエンコや、アメリカのギンズバーグなどが、時には数千に及ぶ大チヨウシユウを前に詩を詠み、熱狂的に迎えられるというニュースはよく聞くところです。

だがわが日本では万葉時代の柿本人麻呂や大伴家持はいざ知らず、明治以後はほとんどそんな話は聞いたことがない。詩といえば文字に書き、活字で印刷され、それをジユクドクするもの、^(b) と思いきまれている。ア ^(a) これは詩本来の機能から考えればまことに異様な現象なのですが、異常だと意識されることすらほとんどない、というほど異常であるわけです。

その、詩人による自作朗読をやるとき、なんとも面映ゆい、と谷川さんは言われた。自分だけでなく、日本の詩人はみなそのようだ、ボソボソボソほとんどきき手に伝わらないみたいなのもあるかと思うと、神憑り式に朗々と詠み下していった、心酔するファンたちが興奮する、という人もあるが、どこかみんなバラバラで、詩を朗読するとはこういうことだ、という共通のスタイルというか、基盤がない。それに比べると、たとえばアメリカの詩人は、自分の作品でも、まるで他人の詩を読むみたいに、平然として朗々としゃべる。^(c) とてもオレは凶々しくはなれないって気がすると同時に、あれがほんとはじゃないかという思いがするのだが——とまあ、こういう話でした。

少し詳しく問い返してみたところ、谷川さんはこんなことも言いました。アメリカの詩人たちは、きき手に話しかけているようだ、自分もそうしようと努力しているほうなのだが、なかなかうまくいかない。ほかの詩人だと、そんなことは無視している人が多いように思う、と。

イ

明治以来はじめて、つまり百年目に詩人が口を開き始めたわけですから、うまくいかないのは当りまえだとも言えるでしょう。だが、これは詩人だけの問題でないことが重要な点だと思っております。

たとえば、学者。大学の先生がたのうち、なん人のコウギが、ちゃんと学生たちに話しかけられているでしょうか。わたしが学生だった三十数年以前から今まで、見聞きする先生がたのコウギは、ほとんどすべて「真理ヲワレハカタル、汝ラ志アラバ聞ケ」といったところで、壇上で声を出しているだけ、学生へ話しかけるといふ姿勢はまるで見えない。これはボソボソ聞き取れぬような低い声でしゃべっている先生も、朗々と声を響かせる先生も同じことです。コウギが、単に音声化された文章を聞き分けるだけのことだったら、本を読んだほうが手っとり早い。

学ぼうとするものに向かって語りかけ、相手とふれ、対話し、相手のところの内になにごとかを起すこと、これが本来教えるということだろうと思うのですが、大学の授業は明治以来学ぶことはあっても、教えるという作業はほとんどなかった。ただ知識の開陳だけがあったのであろうと思うのは思い過ごしでしょうか。

詩人がうたいかけることを知らず、教員が語りかけることを知らぬ。とすれば、文化としての話しことばは、シメツ|^(d)している、と言われてもやむを得まい。だがこのことは久しく気づかれませんでした。ことばとは本来話しことばである、とわたしが著書の中で書いたことに対して、谷川さんは、それは日本においてはたいへんな少数派の主張だろうと言われました。だがヨーロッパでは常識のようだ、とも。

ヨーロッパのことは正確に知らないけれど、日本においては、ことば、と言え書きことばのこと、文学といえ小説のこととアタマからきめてかかって疑うことのない文化人がほとんどだということはわたしも痛感しています。おそ

らくこれは文字がごく少数の知識人の独占するものであり、それゆえに高貴なものだとされた時代の通念から、日本の社会がなにほども変わっていないことを示しているのでしょう。

自分の考えは他人と違うと思う場合、意見を述べる——つまり話す——場合でさえ事態はほとんど同じです。気の強い人だったら、みずからのロンシ^{e)}をあくまで主張し、断固として他人のことを拒絶し、耳を傾けない。これに反して気の弱い人はと言えば、他人が受け入れてくれようがくれまいが、わたしの考えを発言だけはしておきます、という話し方をする。こういう例がまことに多い。□ウ まるで一本の材木が石みたいにまとまった文章をそこへつき出し、置いておくだけです。ことばというものはそのようなものだろうか。

わたしは演劇の世界に入って三十年以上になりますが、この間中わたしを最も考え込ませ悩ませたのは、日本人の習性といってもよいこの対話の成り立たなさでした。会話はほとんどが言いっぱなし、すれちがいであり、相手に働きかけてこれを変え、あるいはその過程でみずからが変わってゆくという志向を持たないのです。ここではドラマなど生まれようがない。心理のモヤモヤや孤立の憂愁はあっても、人と人がきびしくふれ合い、別の次元へ高まってゆくドラマはない。

ということとは、演劇だけでなく、教育の分野においてこそ最も致命的なことではありますまいか。話すことばが、すでに書かれた文章を読み上げ、伝えることを基本として発想されるのが日本式エリート伝来の方法だったとすれば、それは大学の教授から小学校の教員にまで一貫していたと言っていいでしょ。

ある教員からの苦渋に満ちた手紙の一節に「授業中に必死に話をしていても、だれひとり聞いていなくて、だれにも声がつたわってないという経験がたくさんあります」とありました。

子どもを相手にしているからこそこれに気づくことができる。いわばことばの仮死状態から脱出する道を探り始める自覚を持つことができる。大人を相手にする仕事では仮死はそのまま凍結されてゆくでしょう。

国語の授業でも最近はその朗読が重視され始めているようです。だがわたしの知る限り、それは教員の文学的解釈に基づき、センチメンタルな声の抑揚の形成に過ぎぬ場合がほとんどです。[エ]

まず、向かい合ったとき手に話しかけること、きき手の内にことばが入り、リズムとイメージが動き始める。と、それに支えられて読み手の呼吸は変わる。きき手に受け入れられたと感じたところから次のことばが生き始める。詩の回復はことばの生きる力の甦りであるようです。

(竹内敏晴『教師のためのからだだことば考』による)

問1 傍線部(a)～(e)の片仮名を漢字に直しなさい。

問2 次の文を挿入するのに最も適切な箇所は本文中の空欄 [ア] [イ] [エ] のうちどこか、記号で答えなさい。

いずれも、自分のことばを、他者とふれ合い、交流しつつ、変容し成長してゆくものとしてはとらえていない。

問3 傍線部①について、柿本人麻呂の作品として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを

イ 唐衣裾に取りつき泣く子らを置きてそ来ぬや母なしにして

ウ 死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる

エ 近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしのに古思ほゆ

オ やは肌にあつき血汐に触れも見でさびしからずや道を説く君

問4 傍線部②「詩本来の機能」とはどのようなものだと筆者は考えているか。「書きことば」という言葉を必ず用いて三十文字以内で答えなさい。

問5 傍線部③「とても」と同じ品詞の語を次のア～クから一つ選び、記号で答えなさい。

ア こんな夢を見た。

イ しっかり生きよう。

ウ まあ、酷い怪我。

エ すごい熱気だ。

オ きれいな花が咲く。

カ かすかな音が聞こえる。

キ そして君は言う。

ク 行ってまいります。

問6 大学教育に関する筆者の主張の内容として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 明治以降、大学の授業は知識の伝達を重視し、話しことばを基盤としたものへと進化してきた。

イ 教員は学生に聞き取りやすい朗々とした声で発話すべきであり、それが実現されれば授業は改善される。

ウ 教えることとは本来、対話を通じて相手の内面を揺り動かすことであるが、それが実現されていない。

エ それまでは双方向的・対話的だった教育が、大学に入ると一方的なものとなってしまふ。

オ 大学の授業は文章の音声化によって効率化されており、読み聞かせに近いものとして評価される。

問7 以下は、傍線部④「ことばの仮死状態から脱出する」を別の言葉で言い換えた文である。空欄 X に入る言葉
を本文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

X を解消すること。

問8 本文の内容として正しいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 日本では話しことばを通して他者との対話を重視する姿勢が希薄で、対話を通して相互に変容する機会が乏しい。

イ 海外では大勢の前で詩を朗々と読むことが一般的だが、日本では明治以降の教育によってその文化が途絶えた。

ウ 日本では書きことばや話しことばによるコミュニケーションが育つておらず、その弊害が大学教育にも表れている。

エ 自己主張の苦手な人が大半を占める日本人には、言葉が他者に働きかけて変化するという発想が欠けている。

オ 話しことばの文化が重視されている欧米とは異なり、日本では書きことばがあり得べき表現である。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

街には看板やポスターが溢れているし、新聞にも多くの広告が載せられている。テレビからはCMが流れてくるし、インターネットを使えば、^①これまでの消費行動パターンから、私たちが興味をもつかもしい商品やサービスの広告が勝手に現れる。私たちが広告を目にしない日はない。日本では、1日に約3500もの広告をそれぞれが見ることになるという統計結果もある。

広告が存在するのは新聞、雑誌、テレビ、インターネットだけではない。他人が持っているコーヒーショップのロゴが大きく記載されたタンブラーやブランドの紙袋も広告として機能する。実際、スターバックスはテレビや雑誌での広告は行っていない。消費者が購入したスターバックスの商品が^A広告塔として人びとに微笑みかけるから必要ないのだ。スターバックス商品の利用者が^B広告「媒体」として行動しているのである。

また、現代の広告は、消費者の^B虚栄心や社会的承認欲求を刺激するだけではなく、恐怖心を煽ることで商品売り込もうとするものが多い。ブランドの紙袋は、消費者の虚栄心をくすぐり、社会的承認欲求を満たす。ダイエット食品や美容品の広告は肥満や老化に対する恐怖心を煽る。さらに、消費者を扇動する効果を高めるために、虚偽であったり過度な期待を誘発したりするようなメッセージが編み込まれている広告もある。

たとえば、2012年10月、クリスチャン・デオールは、映画『ブラック・スワン』でアカデミー賞主演女優賞を受賞したナタリー・ポートマンを起用したマスカラの広告を発表した。しかし、広告に掲載されたポートマンの睫毛はデジタル処理されており、商品の効果を^a誇大に宣伝したものとみなされ、その広告の使用が禁止された。クリスチャン・デオールの戦略は、デジタル処理された睫毛を提示することで消費者の虚栄心を過度に刺激しようとして失敗したが、虚栄心や欲望を満たしつつ、美化された有名人のようになれるとさりげなく語りかける広告は他にもたくさんあ

るに違いない。

さらに、近年では「オムニチャンネル」というマーケティング戦略が積極的に展開されている。「オムニ」とは「すべて」「完全」という意味だが、これは企業と接触する店舗、Webサイト、カタログ、電話、SNSなどをシームレスに私たちに利用させるために、購買チャンネルのすべてをリンクさせる戦略である。私たちはいつの間にか、自分たちがどこで何を購入し、インターネットで何を検索し、どのようなSNSを利用しているかといった行動の「すべて」を分析されている。そしてそれぞれの行動パターンや嗜好^(b)に合わせてカスタマイズされた広告が私たちに与えられるのだ。

広告は購買活動だけではなく、社会、文化、そして政治活動をも包括^(c)していることを忘れてはならない。私たちが身を投じているのは、「商品・サービス、主義主張、生活様式」の「すべて」がシームレスにリンクした広告という戦略の真ただ中なのだ。広告は、私たちをそれらに「同一化」させようとするメディアなのである。

広告に有名人が起用されるのは珍しいことではない。ただしそれは、広告のなかの有名人が何らかの芸術的、文化的価値を有しているからではない（ボードリヤール）。有名人に価値が付与されるのは、大衆文化のアイコン（icon）である彼・彼女らには何らかの文化的価値があるはずだと私たちが信じて疑わないからだ。換言すれば、有名人が無価値、無内容、無意味であっても、そんなはずはないという私たちの思いこみや、それを理解できないとしたら自分に非があるのではないかといった後ろめたさによって、そのような無内容の有名人に価値が与えられるのだ。

「消費のスターは、外からはさまざまなタイプの人格を代表しているように見えるが、等しく消費の全体を手に入れることができ、消費のなかに一様に自分の幸福を見出す個々の人間を表しているにすぎない」（ドゥボール）。「消費のスター」は、思想家や政治家といった人物とは異なり、消費されることによって有名になる。崇高でもなく、理想的でもない。無価値かもしれないが、特別な力が与えられている。大衆文化が溢れる社会では、神秘的な存在であり、崇拜

を集めることができる。

「あらゆる感受性、あらゆる表情を、空虚のたびひとつの儀礼的な魅力、陶醉に似たまなざし、無垢な微笑において挫折させるために存在している。そういうところでスターは神話に到達」(ポードリヤール)する。そして、人工的な価値や魅力しかもち合わせていないにもかかわらず、私たちはスターを崇拜する。広告に映し出されたスターは、自分がつ神秘的な魅力を商品に付与し、その商品を手に取るように微笑みかける。消費社会の神秘性とはまさしく大量消費そのものによって生み出されるのである。

たばこの広告からも、崇拜される「消費のスター」が私たちを陶醉させんとするしくみが理解できる。2007年に一般社団法人日本たばこ協会が発表したたばこに関する広告の自主基準には、「未成年に人気のあるタレント、モデル又はキャラクターを用いないこと。特に未成年者に訴求するアニメキャラクター等は用いないこと」と定められている。これは、「消費のスター」に未成年者が魅了されることを恐れていることだろう。ここでは、アニメキャラクターの使用も禁じていることに注目する必要がある。神話化されたスターは、実在の人物でなくてもよい。創り出された空想上のキャラクターであつても、私たちに微笑みかけ崇拜するように促し、イデオロギーへの共鳴へと誘うことができるのだ。

(青沼智・池田理知子・平野順也編『メディア・レトリック論 文化・政治・コミュニケーション』)

平野順也『第8章 広告と消費の誘惑 隠された旨趣を読み解く』による)

問1 傍線部(a)～(e)の漢字の読みを平仮名で答えなさい。

問2 傍線部A「人々に微笑みかける」とあるが、この表現は次のア～エの表現技法のうち、どれに該当するか。一つ
選び記号で答えなさい。

- ア 対句法
- イ 直喩法
- ウ 反復法
- エ 擬人法

問3 傍線部B・Cの単語の意味を、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

B. 「虚栄心」

- ア 自分の存在を虚しく思う心
- イ 実際以上に自分をよく見せようとする心
- ウ 他人の意見を虚しく受け流す心
- エ 素直に自身の榮譽を誇る心

C. 「シームレス」

- ア 一定のリズムをもつさま
- イ 急激に変化するさま
- ウ 境界がなく、連続しているさま
- エ 意図せずに起こるさま

問4 傍線部①「これまでの消費行動パターン」とはどのようなものか。本文中から具体的に述べている箇所を五十字で抜き出し、その最初と最後の五字を答えなさい。

問5 傍線部②「人工的な価値や魅力」とあるが、それはどのようにして「消費のスター」に与えられるのか。本文中のことはを用いて、五十字以内で答えなさい。

問6 次の文ア～エのうち、本文の内容と合致しているものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「オムニチャンネル」は、消費者の社会的承認欲求を利用したマーケティング戦略である。

イ たばこの広告では、有名タレントや子どもに人気のキャラクターを使用することで、商品の魅力を付与している。

ウ スターボックスは商品自体が広告塔の役割を担うことで、ブランド価値を強めている。

エ ナタリー・ポートマンを起用したマスカラ広告は、デジタル処理による美しい加工が話題となった。

